

「コロナ流出」批判の中国武漢研究所「汎用コロナワクチン開発」

9/12 中央日報

新型コロナパンデミックを招いたウイルス（Sars-CoV-2）の流出場所と疑われた中国武漢ウイルス研究所が汎用新型コロナワクチンを開発したと主張した。

12日の香港サウスチャイナモーニングポスト（SCMP）によると、武漢ウイルス研究所研究陣は6月、同僚検討学術誌ACSナノで発表した論文で、従来のすべての主要コロナ変異と未来に流行する可能性があるコロナ変異に対抗して普遍的な保護を提供できるナノワクチン（ナノ粒子形態のワクチン）候補を開発したと明らかにした。

研究陣は従来のワクチンは新型コロナ拡大を防いで致命率を低めたが、そのどれもあらゆる種類の変異に対する広範囲、普遍的な保護を提供できなかつたと指摘した。

続いてコロナウイルス抗原決定因子（epitope）と血中たんぱく質フェリチン（ferritin）を結合すれば、デルタ、オミクロン、WIV04など多様な新型コロナ変異に対抗する鼻腔内ナノ分子ワクチンを作れることを発見したと明らかにした。

また研究陣はマウスの実験でこのナノ分子ワクチンが他の形態のコロナウイルスに対しても長く持続し、広範囲な保護を提供する可能性を見せたとし、これは未来の変種拡散と感染を予防するのに効果的かもしれないと述べた。

続いて「現在進行していて未来に近づくSars-CoV-2変異によるパンデミックは、広範囲なスペクトラムの保護を提供する効果的なワクチンの必要性を強調する」とし「我々が作ったナノワクチンが普遍的なコロナウイルスワクチンのための有力な候補になる」と付け加えた。

2020年からコウモリのコロナウイルス研究を進めてきた武漢ウイルス研究所はその間、Sars-CoV-2ウイルス流出説があった。

武漢では2020年1月に中国で最初にコロナ患者が報告された。感染者が短期間に急増すると、中国当局は同年1月23日から76日間にわたり武漢を封鎖し、全国から医療関係者およそ4万人を投入して対応した。

【写真】中国・武漢で新型コロナの実態告発した陳秋実



中国・武漢で新型コロナの実態告発した陳秋実

2020年中国武漢で新型コロナウイルス拡散実態を告発した後に行方がわからなくなった市民記者の陳秋実。彼が3月に約1年ぶりに釈放されていたことがわかった。陳秋実は新型コロナウイルスが広がり封鎖された武漢に入り、診療すら受けられない現実を見せたり、病院の葬儀式場に潜伏して実際の死亡者数がどれだけなのか検証するなど、中国政府にとって敏感な部分を集中取材

した。